

2) 当科における家族性高脂血症患者の冠動脈造影所見についての検討

樋口浩太郎・竹本 稔  
井田 徹・今野 拓  
松原 琢・田村 雄助  
山添 優・相沢 義房 (新潟大学第一内科)

【目的】家族性高脂血症 (以下 FH) 患者の背景 (年齢, 性, コレステロール値, 心臓カテーテル検査目的等) と冠動脈硬化の程度を造影所見をもとに検討する. 同一病変の経時的变化, PTCA 成功率, 再狭窄率, AC バイパス開存率を検討する.

【対象】当科において FH と診断し冠動脈造影検査を行った21症例を対象とした.

【結果】高度狭窄 (AHA 90%以上) の有無と年齢, 性, コレステロール値等は有意な相関を示さなかった. 造影検査前, 他検査により狭心症, 心筋梗塞と診断された例では15例中14例に高度狭窄を認め, トレッドミル検査陰性例では, 認められなかった. 狭心症患者は心筋梗塞患者に比し, 複数病変率が高く (狭心症患者 9例中

7例, 心筋梗塞患者 6例中2例), 高率に AC バイパス術が選択された. 冠動脈硬化の経時的变化を6例に対し評価した. 全例, 内服治療によりコレステロール値の低下がみられたが, 冠動脈硬化の改善例は無く, 2例で進行を認めた. 冠動脈硬化進行群と未変化群ではコレステロール値の低下は同程度であった. PTCA を5例 7病変に対して行い, 6病変で良好な拡張を得た. early study を5病変に対して行い, 2病変に再狭窄を認めた. AC バイパスは7例に対し行われた (SVG 10 LITA 2). 術後検査では全バイパスが開存し, その後, 3病変で静脈グラフト内に AHA 90% 以上の狭窄が出現した.

【結語】FH 患者についても, トレッドミル検査 負荷心筋シンチにより高度狭窄の有無を推測できると考えられた. 造影検査前, 狭心症例では複数病変の可能性が高い傾向を認めた. PTCA 成功率 再狭窄率 AC バイパス開存率は FH 患者についても, 他患者と差を認めないと考えられた.